第1回 日本体育学会若手の会セミナー報告書

グローバルキャリアネットワークの構築 ~なぜその道を選んだの?~

開催日:2020年11月13日(金)

日 時:18:00~20:00

形 式:オンライン開催

主 催:一般社団法人 日本体育学会若手研究者委員会

有志団体 日本体育学会若手の会

日本体育学会若手研究者委員会 第1回セミナー

テーマ:「グローバルキャリアネットワークの構築~なぜその道を選んだの?~」

日 時:2020年11月13日(金) 18:00~20:00

会 場:オンライン開催

主催:一般社団法人日本体育学会若手研究者委員会、有志団体日本体育学会若手の会

話題提供者

吉原 利典 / Toshinori Yoshihara(順天堂大学)

「フロリダ大学での研究留学を振り返って」

関 慶太郎 / Keitaro Seki(日本大学)

Studying abroad as a visiting doctoral student

Tsukuba to Jyväskylä, Finland J

ライトナー・カトリン・友海子 / Katrin Jumiko Leitner(立教大学) 「『柔道』と『日本語』が拓いてくれた道」

ソリドーワル・マーヤ /Maia Sori Doval (津田塾大学)

「ドイツから日本へ:留学生から研究者への道」

コーディネーター

城所 哲宏 / Tetsuhiro Kidokoro (明治安田厚生事業団 体力医学研究所) 辻 大士 / Taishi Tsuii (筑波大学)

当日のスケジュール

18:00-18:05 開会挨拶

18:05-19:05 講演者話題提供

19:05-19:20 全体ディスカッション(登壇者同士によるディスカッション)

19:25-19:50 交流セッション(3つのセッションに分かれて登壇者と交流)

19:50-20:00 閉会挨拶(まとめ、写真撮影、アンケートのお願い)

1. 開催趣旨

この度、記念すべき第 1 回若手の会セミナーを開催する運びとなりました。テーマは「グローバルキャリアネットワークの構築~なぜその道を選んだの?~」です。グローバル時代の到来により、学術界も、人や情報の往来が激しくなっています。これから海外留学を考えている人も多くいることでしょう。本セミナーでは日本から海外へ留学した若手研究者、ならびに海外から日本に留学した若手研究者に、きっかけ、留学先での生活、資金、国際共同研究、現在のキャリアにどのように活かされているかなど、多様な視点から情報提供してもらうことを考え、これ以上ない登壇者を選びました。吉原利典先生(順天堂大学)、ライトナー・カトリン・友海子先生(立教大学)、関慶太郎先生(日本大学)、マーヤ・ソリドーワル先生(津田塾大学)です。登壇者の先生方から、学会等のフォーマルな場では聞くことが難しい重要な情報を、「隣の研究室の先輩に聞く」ような気軽さで聞けるよう、また、同じ志の人と交流できるよう、交流セッションも設けました。本セミナーが、新たな道を切り開くことを考えている皆様の背中を押す機会になっていることを、若手研究者委員会は願っています。

(企画検討グループ長:東海大学 秋吉遼子)

2. 全体会報告

2-1. 登壇者紹介

日本から海外へ



吉原利典



順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科 助教

留学先

米国・フロリダ大学



関慶太郎



日本大学文理学部 助教

留学先

フィンランド・ユヴァスキュラ大学

海外から日本へ



ライトナー・カトリン・友海子

立教大学コミュニティ福祉学部 准教授

オーストリア出身



マーヤ・ソリドーワル

津田塾大学国際関係学科 専任講師

ドイツ出身



(第1回若手の会セミナー登壇者紹介スライドより)

2-2. フロリダ大学での研究留学を振り返って

〈Take a look back on my Research Life at the University of Florida in the USA〉 吉原 利典 (順天堂大学)

なぜ海外で研究する必要があるのでしょうか?海外で研究した研究者のほとんどは、海外での経験の中で、幅広い経験、人とのつながり、英語力、生産的な生活、良い研究結果、そして自分自身のキャリアアップを得たと考えているようです。確かに、私自身もアメリカに行く前は、留学のメリットについて同じ意見を持っていました。私は、日本学術振興会(JSPS)の海外特別研究員として、2017年から2019年にかけて、米国フロリダ大学のスコットドパワーズ博士の研究室(Integrative Muscle Biochemistry Lab)で、2年間研究に従事していました。パワーズ博士の研究室では、人工呼吸によって引き起こされる横隔膜の萎縮や機能不全の原因となるメカニズムを解明するプロジェクトに取り組んでおり、この分野で世界のトップレベルの研究を行っている研究機関です。このように研究を行う上で、最高の研究環境が整っていたわけですが、私はパワーズ博士の研究室で経験した"One Team な研究環境"に感銘を受け、それが研究留学を行うことのこの上ないメリットであるように感じました。私が体験した海外での研究生活を紹介することで、これから米国での研究留学を考えている若手研究者の方々が、実りのある研究生活を送れることを期待しています。

2-3. Studying abroad as a visiting doctoral student

Tsukuba to Jyväskylä, Finland

関 慶太郎(日本大学)

筑波大学の博士後期課程在学中の2017年8月から2018年3月にフィンランドのユヴァスキュラ大学(University of Jyväskylä)への留学についての発表であった。ユヴァスキュラ大学はフィンランド国立の総合大学であり、教育学部とスポーツ科学部が有名な大学である。留学のきっかけとなったのは、留学の前年である2016年に筑波大学で開催された国際学会にInvited speaker として参加していた Heikki Kyröläinen 先生に自身の研究内容と留学の意思を伝えたことであった。留学の承諾は得られたものの、筑波大学とユヴァスキュラ大学との間には交換留学協定がなかったため、Visiting student として留学することになった。Visiting student が申請できる奨学金はごく僅かであったが、留学先国の奨学金(Finnish Government Scholarship Pool)を受給し、留学することができた。フィンランドでの生活は日本と比べると冬の寒さや日照時間の短さが際立つ厳しい気候であったが、Kyröläinen 先生のきめ細かな指導のもとで論文の執筆・修正に取り組んだ。この留学を通して取り組んだ研究は著名な国際誌に掲載され、博士号の取得に繋がった。また、留学中にできたユヴァスキュラ大学とのネットワークを活かし、現在も共同研究に取り組んでいる。

2-4.「『柔道』と『日本語』が拓いてくれた道」

Katrin Jumiko LEITNER(立教大学)

今回の、「グローバルキャリアネットワークの構築」をテーマとした第 1 回日本体育学会若手の会セミナーにおいて、「『柔道』と『日本語』が拓いてくれた道」というテーマで発表をさせていただいた。柔道選手としての経験や日本での留学など、今までただ好きにやってきただけのことが自然に今の私=日本での大学教員や研究者につながったことを改めて確認することができた、とても貴重な機会となった。このある種のグローバルキャリアにつながったのは、柔道や留学を通して身に付けることができた「日本語」が重要な要素であることはもちろんだが、それより多くの人との交流やつながり=ネットワークのほうは、自分自身をここまで成長させてくれた最大の要因であることも確信している。

他 3 名のスピーカーの発表を聞いて、共通点のほうは多かったが、留学の経験に対して 考えたことや感じたことなど、異なることもたくさん発見できた。また、それぞれが留学や 海外経験から得られたものは、その後のキャリアには様々な形でしっかりと活かされてい るというのも強く感じた機会でもあった。これから、私たちのように、より多くの若手研究 者が言葉の壁を乗り越え、多くの刺激を与えてくれる「世界」に飛び込んで挑戦し、また、 多くの人がそれによってつながっていくことを期待したい。本セミナーで、その冒険の旅へ の後押しになる「何か」を少しでも与えることができたなら嬉しい限りである。

2-5.「ドイツから日本へ:留学生から研究者への道」

Maia Sori Doval (津田塾大学)

第 1 回日本体育学会若手の会・セミナー「グローバルキャリアネットワークの構築: なぜその道を選んだの?」において「ドイツから日本へ: 留学生から研究者への道」をテーマにして発表を行った。私自身は高校生の時に日本で交換留学したことをきっかけに、ドイツのハインリッヒ・ハイネ・大学法文学部に入学すると同時に、日本学を専攻した。2006 年3月、同大学の人文科学研究科を修了し、国際武道大学・大学院武道・スポーツ研究科に入学し、2008 年に修了した。続いて、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科に入学し、2013 年博士を取得した。自分の経験を振り返ると、留学は私の研究者としてのキャリアの重要な一歩になった。留学する際に、大学の名前より専門分野に適切な研究や学習環境を優先して選ぶことや留学に行く前に言語能力を極めることは重要である。海外や国内に関係なく、大学院は研究者としての未来を作る重要な基盤であると私が思っている。したがって、大学院レベルから学会での参加や発表、共同研究や論文執筆等を含む研究活動とネットワークを作ることは大事である。自分の強みを活かして自分しかできない研究テーマを見つけて研究者としての「個性」を作るのは成功するコツの一つではないかと私が思っている。

3. 交流セッション報告

3-1. セッション①: 吉原先生セッション報告

アメリカ・フロリダ大学へ研究留学された吉原先生を囲んだ交流セッションには、学部生から社会人大学院生の方まで幅広い層の方々の参加があった。直ちに留学したいというよりもキャリアアップのために、あるいは視野を広げるために留学を検討している方が多かった。吉原先生の場合には留学先が当時の指導教員が過去に留学し、内情を良く知る研究室であったとのこと。そしてアメリカでは研究室のメンバー全員が同じ研究方針で活動している傾向があるとのこと。そのため吉原先生からは、参加者に対して、まず短期間の渡航や研究室訪問などを通して受入先の状況や受入教員の方針をよく把握することが重要であるといった主旨のアドバイスがあった。

(座長 鈴木宏哉)

3-2. セッション②: 関先生セッション報告

関先生の交流セッションにおいては北欧への留学を検討している方が参加された。主な話題は、①留学期間について、②現地での生活やリフレッシュの仕方について、③留学中の就職活動についてであった。当初計画では約 1 年間の予定であったが、日本での就職が決まったことで予定より早く帰国された。夏の終わりから 3 月にかけての留学であったため暗くて寒い日々が続き、娯楽や食の楽しみも乏しかったものの、散歩やバドミントンをしたり週末に日本の友人と通話したりしてリフレッシュされていた。その一方、研究環境や指導教員に恵まれ、可能であればもっと長く留学したかったという思いが強く、今後また機会があれば同じ研究室への留学を望まれていた。留学中の就職活動においては書類の準備や提出に手間取ることがあるため、あらかじめ日本国内の家族や知人に協力を依頼しておくことが望ましいとのアドバイスがあった。

(座長 辻 大士)

3-3. セッション③:カトリン先生・ソリドーワル先生セッション報告

カトリン先生、ソリドーワル先生をお迎えしての交流セッションでは、主に「海外から見た日本の研究環境」についてお話しを伺った。そこで筆者が感じたのは、次の2点である。1点目は、"日本の"体育・スポーツ・健康科学の可能性である。例えば、武道を研究対象とする場合、欧州ではジャパノロジー(日本学)や東アジア学の一部として扱われるのみであるが、他方、日本においては多様な地域・大学において研究ができる環境にあるとのことである。そこには、武道に限らず、日本独自の研究環境があるように感じられた。2点目は、運動ないしはスポーツ"実践"の重要性である。カトリン先生とソリドーワル先生は、柔道や空手等の実践から研究の世界に進まれた、という共通の経緯をお持ちであった。そこから

は、実践を通して、あるいは実践から研究することの重要性を改めて教えて頂いたように思う。日本も含めた各国・地域には、研究に対する独自の環境や文化があり、日本でできること、海外でできること、両者の特性を検討し、活用していくこともまた、これからの体育・スポーツ・健康科学の在り方を検討する上で重要な視座となり得るのではないか、と感じる1日であった。

(座長 中澤雄飛・朝倉雅史)

4. 全体のまとめ

金曜の夜という日時設定にも関わらず、多くの方にご参加いただき、盛況のうちに終えることができました。4名のシンポジストによる素晴らしいご講演に加え、その後の交流セッションも大変好評でありました。まさに、若手研究者委員会が目指す「垣根のないフラットな議論」が体現できたのではないかと感じています。今後も、若手研究者委員会ならではの企画および定期的なセミナー開催を予定しておりますので、引き続きご参加いただけたら幸いです。コロナ禍の現在、「物理的」に海外に渡航することが困難な状況が続いております。一方、オンライン配信など、テクノロジーの進歩により、国内にいながらも「世界」がより身近に感じられる時代となってきています。本セミナーが、これから「世界」にチャレンジしようと思っている方の一助になったのであれば、とても嬉しく思います。最後に、シンポジストの先生方、参加者の皆様、そして若手研究者委員会の皆様に御礼申し上げます。

(コーディネーター 城所哲宏)

セミナーの様子 (話題提供)

日本から海外へ

吉原利典先生



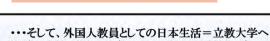


関慶太郎先生





海外から日本へ

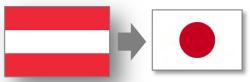


2013/9~ Rikkyo University (Department of Sport and Wellness)

- ・日本の文化や日本的な考え方等を考慮・尊重すること
- ▶研究における**多言語の言葉や表現の難しさ**を痛感
- ▶すべてのことが常に大きなチャレンジ=大きなエネルギーが必要



ライトナー・ カトリン・友海子先生



留学を含む研究者・専任教員としてのキャリアを成功させるため 好きな研究分野・どうしても知りたい研究課題を見付ける 留学はこれからの研究者としてのキャリアへの重要なステップ 早かに応募の準備 留学先の選択 大学の名前より専門分野に通りな研究・学習環境を優先にして選ぶ 留学に行ぐ前に置意能力を極める(日本の場合は日本語能力試検N 2 以上) 留学生町土より地元の学生・研究者・教員と交流する ・ 大学院レベルで積減的に学会での参加や発表 ・ 共同研究や倫文教職等を含む研究活動を行う ・ オットワークを作る ・ 研究者・教育者としての経験を接触を請む

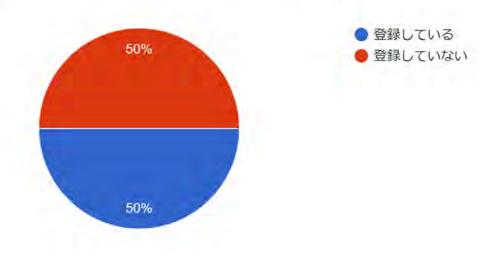
マーヤ・ソリドーワル先生



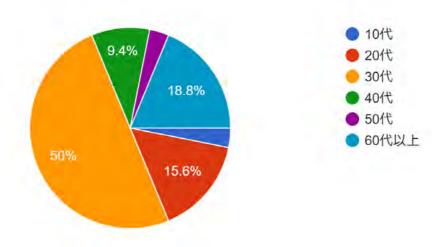
第1回 日本体育学会若手の会セミナー報告書

参加者アンケートの結果

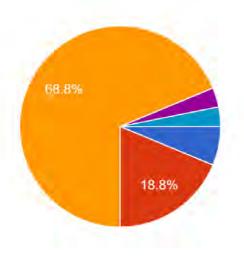
1. 若手の会メーリングリストへの登録の有無を教えてください。 32件の回答



2. あなたの年齢 (年代) を教えてください。 32件の回答

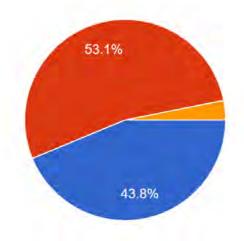


3. あなたのお立場 (雇用形態) を教えてください。 32件の回答



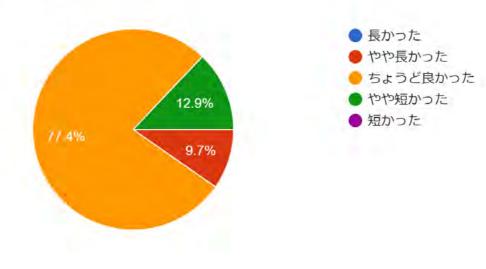
- 学部生
- 大学院生(現職大学院生はこちらを選択してください)
- 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)
- 有職者(研究教育職以外)
- 新聞社
- 自営業

4. 本セミナー全体の内容はいかがでしたか? 32 件の回答

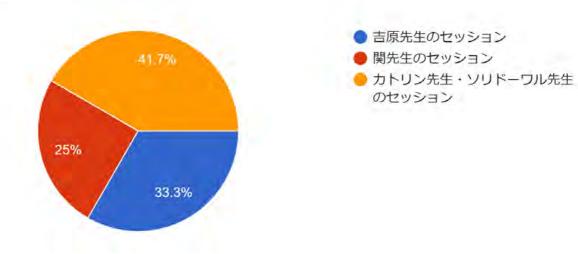


- ●とても良かった
- 良かった
- あまり良くなかった
- 良くなかった

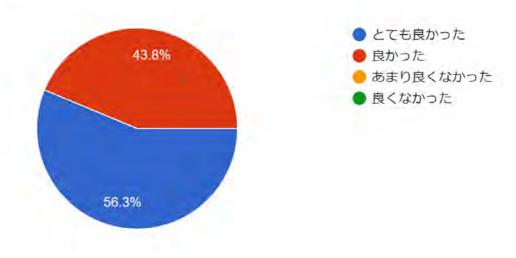
5. セミナー全体の時間はいかがでしたか? 31 件の回答



6. 参加した交流セッションを教えてください。 24件の回答



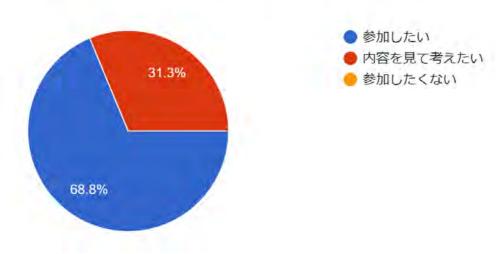
7. オンライン形式でのセミナー開催はいかがでしたか? 32 件の回答



- 8. 本セミナーに関するご意見・ご感想をご自由にお書きください。
- ・オンラインセミナーのため、遠方にいる研究者でも参加できました。[40代,有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・お忙しい中開催頂きありがとうございました。後半は家の都合で抜けてしまいましたが、オンライン開催という事で仕事などの都合もつけやすく有難かったです。貴重な学びとなりました。[30代, 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・すぐに質問がでてこなかったのですが、優しく対応していただきました。留学に対するモチベーションが上がりました。 [10代, 学部生]
- ・ちょうど良い時間配分だったと思います [40代, 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・海外留学についての資金的な情報や現地での研究活動など非常に興味深いお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。 [20代, 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・海外留学を自ら考えるよい機会になったと思う。文科省の長期在外研究員制度がなくなったので、なおさらこのような情報交換は必要だと思う。[60代以上,有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・所用が入り途中退席しましたので、最後まで参加できなかったのですが、参考になりました。ありがとうございます。 [50 代,自営業]
- ・諸事情で全てに参加できず、申し訳ありません。ただ、若手のリアルな声が聴ける場として非常に有意義なセミナーでした。ありがとうございました。[30代,有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・小人数に分かれるセッションも用意されており、先生方との交流を持つことができた良い時間になりました。ありがとうございました。 [30代, 大学院生(現職大学院生はこちらを選択してください)]
- ・発表された先生方のプレゼンが明解で素晴らしく、留学に対する意欲が増しました。運営に関わりご準備された先生方も含めましてありがとうございました。 [30代,大学院生(現職大学院生はこちらを選択してください)]
- ・留学している方々のお話を聞く機会が少ないのでとても良い機会でした!! [20代,学部生]

- 9. 次回以降の「若手の会」主催セミナーで取り上げて欲しいテーマがあれば教えて下さい。
- ・コロナが収束するまで難しいとは思いますが、合宿形式で参加したいと思いました。 [30代, 大学院生(現職大学院生はこちらを選択してください)]
- ・コロナ禍におけるデータ収集の工夫について [30代, 有職者 (研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・コロナ禍及びアフターコロナでの若手研究員だからこそできる研究活動について [20代, 有職者(研究者・教員・非常 勤講師を含む)]
- ・英語の学習方法、各領域における文献検索の方法 [40代, 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・学際的な研究とは何か。体育とスポーツの分野で社会科学的な研究と自然科学的な研究との融合、学際的な視野を持つため、企画をしてほしいです。[40代, 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・現地の生活、タイムスケジュールがどうなっていたかなど [10代,学部生]
- ・国際誌の情報や日本人の活躍、動向等 [30代, 有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]
- ・若手という視点で、今若者の参加が多いeスポーツなどのテーマは個人的に魅力的です。 [20代,学部生]
- ・就職活動について、地域や領域ごとの情報交換など、卒論指導や学生指導について [30代, 大学院生(現職大学院生はこちらを選択してください)]
- ・比較的短期間に博士取得ができる制度をめぐる研究への功罪[60代以上,有職者(研究者・教員・非常勤講師を含む)]

次回以降も「若手の会」主催セミナーに参加したいか教えて下さい。 32件の回答



4. 本セミナー全体の内容はいかがでしたか?

	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった
10代	1	0	0	0
20代	2	3	0	0
30代	8	7	1	0
40代	2	1	0	0
50代	0	1	0	0
60代以上	1	5	0	0

	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった
学部生	2	0	0	0
大学院生(現職大学院生はこ ちらを選択してください)	2	3	1	0
有職者(研究者・教員・非常 勤講師を含む)	10	12	0	0
有職者(研究教育職以外)	0	0	0	0
その他	0	2	0	0

5. セミナー全体の時間はいかがでしたか?

	長かった	やや長かった	ちょうど良かった	やや短かった	短かった
10代	0	0	1	0	0
20代	0	0	5	0	0
30代	0	1	12	3	0
40代	0	0	2	1	0
50代	0	0	0	0	0
60代以上	0	2	4	0	0

	長かった	やや長かった	ちょうど良かった	やや短かった	やや短かった
学部生	0	0	2	0	0
大学院生(現職大学院生はこ ちらを選択してください)	0	0	5	1	0
有職者(研究者・教員・非常 勤講師を含む)	0	3	16	3	0
有職者(研究教育職以外)	0	0	0	0	0
その他	0	0	1	0	0

6. 参加した交流セッションを教えてください。

	吉原先生のセッション	関先生のセッション	カトリン先生・ソリ ドーワル先生のセッ ション
10代	1	0	0
20代	2	1	1
30代	4	4	5
40代	1	0	2
50代	0	0	0
60代以上	0	1	2

	吉原先生のセッション	関先生のセッション	カトリン先生・ソリ ドーワル先生のセッ ション
学部生	2	0	0
大学院生 (現職大学院生はこ ちらを選択してください)	2	1	1
有職者(研究者・教員・非常 勤講師を含む)	4	4	9
有職者(研究教育職以外)	0	0	0
その他	0	1	0

7. オンライン形式でのセミナー開催はいかがでしたか?

	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった
10代	1	0	0	0
20代	5	0	0	0
30代	9	7	0	0
40代	2	1	0	0
50代	0	1	0	0
60代以上	1	5	0	0

	とても良かった	良かった	あまり良くなかった	良くなかった
学部生	2	0	0	0
大学院生(現職大学院生はこ ちらを選択してください)	5	1	0	0
有職者(研究者・教員・非常 勤講師を含む)	11	11	0	0
有職者 (研究教育職以外)	0	0	0	0
その他	0	2	0	0

次回以降も「若手の会」主催セミナーに参加したいか教えて下さい。

	参加したい	内容を見て考えたい	参加したくない
10代	1	0	0
10代 20代	4	1	0
30代	12	4	0
40代	3	0	0
30代 40代 50代	1	0	0
60代以上	1	5	0

	参加したい	内容を見て考えたい	参加したくない
学部生	2	0	0
大学院生 (現職大学院生はこ ちらを選択してください)	4	2	0
有職者(研究者・教員・非常 勤講師を含む)	14	8	0
有職者(研究教育職以外)	0	0	0
その他	2	0	0

全体集合写真



